学校給食だより秋田っ子給食　NO－167

公益財団法人秋田県学校給食会

黙食の余波

政府がコロナ対策の基本的対処方針から「黙食」を推奨する記述を削除したのは昨年 11 月のことだった。文部科学省も「適切な対策を取れば学校給食で会話は可能」とする通知を出した。

それから間もなく 1 年がたとうとしているが、東京都内の小学校長から「まだ 100 人近くがパーティション（仕切り）をして給食を食べている」と打ち明けられ驚いた。

1 学年 4～5 クラスの比較的大きな学校だが、「飛沫が飛び散るから」と班になって食べることを拒む児童が少なくない。いまだに全員が黒板の方を向き。“個食”を続けているクラスが主流だという。

2 学期に入ると、入学して日が浅い 1、2 年生はすべての児童が仕切りを外すことができた。だが、黙食期間が長かった高学年には根強い抵抗があり、1 クラスで 5，6 人は集団での食事を嫌がるという。

本人の意思もあれば、家庭の意向というケースもある。マスクをする児童は減っても、食事となればより敏感になるのはやむを得ないのだろう。

黙食を緩和した時から、現場では「3 年近く続けた習慣を急にやめられるのか」と先行きを懸念する声が上がっていた。一部は今も余波に見舞われている。

「さすがに取り外すように強制はできない」と頭を抱えていたくだんの校長だが、遠足に行った先で意外な場面に出くわした。いつもは仕切りを決して外さない児童が仲間と集まって、わいわい話をしながら仲良く弁当を食べていたのだという。

「教室で給食を食べる」という場の設定が、ともすれば思考停止につながっているのかもしれない。それならば、たまには校舎の屋上で給食の時間を設けてはどうだろう。青空の下、遠足にやって来た気分で。

（令和 5 年 9 月 26 日（火） 秋田魁新聞「杉」より一部抜粋）